

都留市史

通史編

徳川家康の入 本能寺の変によって信長が横死し、その余波をうけた河尻秀隆は、甲斐の地侍一揆によって六甲と北条氏 月一八日甲府で謀殺され、わずか三か月余にして織田氏の武田遺領支配は終った。その後はいち早く甲州へ入った徳川家康が支配するところとなり、武田氏滅亡時に保護しておいた武田遺臣らを登用して、甲斐掌握策を進めていった。ところが郡内領へは北条氏の進攻が早く、六月一九日付の忍草（忍野村）の渡辺庄左衛門尉宛の北条氏虎印判状（『戦国遺文』北条氏篇二三四九号）によれば、北条勢の郡内進攻に際して縁者を集めて味方した渡辺氏の忠節を賞している。

この時、郡内領に攻め込んできたのは、北条左衛門大夫氏繁・氏舜・左衛門佐氏忠といわれており、谷村館へ入って御坂・笹子両峠より国中まで攻め入り、徳川方の鳥居元忠と戦っている（『甲斐国志』古跡部）。北条氏忠がこの時期郡内に滞在していたことは、同年七月に小山田弾正ら二、三百人の郡内衆を武蔵鉢形城まで召し連れるよう命じた文書（同前）や、九月二〇日に河口御師の渋江氏に武州への旦那廻りの過所を与えていることによっても明らかである（甲府市・渋江文書）。とりわけ前者では小山田一族の境弾正有誠が北条氏忠に従っている点が目立され、壬午の乱でも成敗されずに生き残っていたことが明らかである。

北条氏政は、この時三方作戦をとっており、本隊は当主氏直を大将として厩橋城（前橋市）の滝川一益を攻

め、六月一九日の神流川合戦でこれを破って西進し、碓氷峠を越えて信濃へ侵攻し佐久郡を制圧している。さらに南下して七月下旬には諏訪を経て甲州へ攻め入っている。もう一隊は鉢形城主北条氏邦が秩父口から雁坂峠越えて笛吹川沿いに南下したようであるが、この方面では目立った成果を得られなかった。さらに足柄峠から駿東郡へ進攻した一隊もある。こうした北条氏の攻勢に対して、徳川家康は本能寺の変の際に信長の招待で穴山信君とともに堺見物をしていたこともあって甲州入りが遅れ、七月三日にようやく浜松を出発している。中道路に入り、八日に精進宿で一泊した後、九日に右左口宿（中道町）に到着している。この道中を九一色衆の頭目であった本栖の渡辺因幡助（ひつやのすけ）らが警固し、後にその褒賞として九一色衆は家康より諸商売役免許状を与えられている。家康は同月一〇日に甲府へ入り、先発していた諸将や武田遺臣を糾合して体制を整え、若神子（須玉町）まで迫ってきた北条氏直に対抗するため、八月一〇日自ら新府城へ入った。翌日には塩川の対岸の日之城を修築し、さらに穴山能見城の東にも砦を築いた。

八月一二日には、谷村城を拠点としていた北条氏忠が御坂峠を越えて黒駒へ攻め入り、甲府を守っていた鳥居元忠らが上黒駒でこれを迎え撃った。これを黒駒合戦というが、武川衆らの活躍によって徳川軍が大勝している。一方の若神子で対陣中の家康と氏直とは対陣が三か月に及び、その間大きな合戦もなく、一〇月二九日に和議が成立し、北条氏直は兵を引いた。この時の和議の内容は、西上野領と真田昌幸が領有していた沼田領を北条氏領とし、信濃佐久郡と都留郡内領を徳川領とするものであり、同時に家康の二女の督姫が北条氏直に嫁すことも約束された。

こうして徳川家康が甲斐一國を領有することとなり、郡内領は鳥居元忠に与えられた。家康は国内の再編成を進め、一応の仕置を済ませた後、一二月一二日に甲府を出発して浜松城へ帰った。